

めざす児童生徒像

『智仁勇 未来を拓く生徒』
 「智」 深く考え、判断できる生徒
 「仁」 思いやりのある生徒
 「勇」 自ら行動できる生徒

※児童生徒結果-教員結果・保護者結果

目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目	中間			年度末			達成状況の分析	改善策
				数値・アンケート結果 (%)		※差	数値・アンケート結果 (%)		※差		
				教員	児童生徒・保護者		教員	児童生徒・保護者			
(学校重点項目)	生徒指導	④を90%以上にする。	① 学校では自分は大切にされている。	93			94			①～④の項目で中間評価より肯定的な回答の割合が増加している。特に③は8%増加した。2学期は行事など、生徒主体で取り組む活動がたくさんあり、生徒が主体的に取り組めるように先生方が黒子に徹しサポートした結果、肯定的な回答が増加したと考えられる。また、一人一役など一人一人に役割・仕事を与え、活動させることで自己有用感が高まったのではないかと考えられる。 ④の項目は3%向上し、年度当初の目標である「④を90%以上にする。」を達成した。	生徒の自己肯定感・自己有用感を高めるため、授業や学校生活において褒める・認める声掛けをこれまで通り継続して行っていく。 行事だけでなく、日常の中でも一人一人に意図的に役割を任せ、生徒全員の活躍の場をつくり、さらに自己有用感等を高めていきたい。 生徒の心の変化をしっかりとつかみ、タイムリーで前向きな声掛けを学校全体で行っていく。
			② 学校にいと安心する。	84			89				
			③ 学校では自分が役立っていると感じる。	72			80				
			④ 学校が楽しい。	88			91				
			⑤ みんなで何かをするのは楽しい。	97			97				
			集計	87			92				

目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目	中間			年度末			達成状況の分析	改善策
				数値・アンケート結果 (%)		※差	数値・アンケート結果 (%)		※差		
				教員	児童生徒・保護者		教員	児童生徒・保護者			
重点項目	働き方	①について100%にする。	① 80時間越えゼロに向け、時間外勤務の削減に取り組んでいる。	74			76			①の項目は中間評価より改善は見られるが、76%と低い割合で目標指数に達していない。②の項目は中間評価に引きつづき100%であり、全教員が創意工夫をしながら業務を遂行していることが伺える。③の項目は中間評価より20%アップし改善が見られ、職員の意識の改善が見られる。しかし、④の項目は中間評価より10%以上下回る結果となった。原因として、学校行事や部活動の大会などがコロナ禍以前に戻りつつあり業務内容が増えていることが考えられる。	学校全体で業務の見直しを行ったため、次年度に向けて縮小や削減できる取組を決定していく。併せてICTの活用により取組を簡素化することやSSSを活用して事務的な業務を減らすことなどを推進していく。また、できる限り複数担当で業務を分担したり、優先順位を決めて効率的に行ったりすることを助言していく。
			② 学校組織の中で自分の役割が明確であり、創意工夫しながら取り組むことができています。	100			100				
			③ 月1回定時退校ができた。	68			88				
			④ 計画的に休養をとることができた。	89			76				
			集計								

目標	項目	目標指標	評価達成度アンケート内容・調査項目	中間			年度末			達成状況の分析	改善策	
				数値・アンケート結果 (%)		※差	数値・アンケート結果 (%)		※差			
				教員	児童生徒・保護者		教員	児童生徒・保護者				
小松市共通重点項目	学校研究	すべての項目で90%以上にする。	① 研究主題に迫る目指す授業スタイルを共有し、単元(授業)構想シートなどの具体的な取組を共通実践している。	89			100			①・②の項目はいずれも100%の数値だった。授業改善を主とする学校研究に前向きに取り組もうとする姿勢が伺える。授業づくり強化月間や拡大教科会等の取組や、研究だよりによる取組の浸透によって数値が上昇したものと考えられる。	肯定的な回答は100%だったが、引き続き授業改善に向けての共通実践を進めていく必要がある。生徒の実態を踏まえ、特に来年度は基礎基本の定着と対話による考えの深まりを目指して、単元構想力を高めるための研究を推進していきたい。	
			② 授業研究では、教職員一人一人が子供の姿を語ったり、改善案を示したりするなど主体的に取り組んでいる。	94			100					
			集計	92			100					
	指導力の向上	「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善	①～⑤の生徒のアンケートの割合を90%以上にする。	① 児童生徒は、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいる。	94	83	(11)	88	91	3	③の項目以外は目標指数を達成することができた。しかし、教師の肯定的な回答の割合が減少した項目が多く、③、④、⑥の項目では、生徒と教師の肯定的な回答の割合の差が大きくなった。その原因としては、教師は、学校研究の項目の結果から授業づくりには前向きに取り組んでいることが分かるが、生徒の姿が教師の求めるレベルには達していないと感じている教師が多いからだと考える。生徒のアンケート結果からは、①、③の項目で1年生の肯定的な回答の割合が10%以上増加した。1年生は中学校の授業に慣れてきたことに加え、教科指導だけでなく学年の取組が効果を挙げたのではないかと考えられる。 ④～⑥の項目では、生徒の肯定的な回答の割合が高く、話し合う活動、振り返る活動、ICTを活用した活動を主体的に行っていると言える。しかし、⑥の項目において、教師の肯定的な回答の割合が低く、教科による使用頻度や使用方法に差があるのではないかと考える。	授業改善については、引き続き学校研究の重点を意識して取り組んでいく必要がある。また、話し合う活動や発表、振り返る活動など、生徒の学習状況が教師側が求めるレベルに達していないことから、生徒の実態を把握し、生徒の力をより引き上げるための実効力のある取組を考え、実践していく必要がある。具体的には、教師側が求めるレベルはどのようなものかというモデルやゴールの姿の共有や見通しを示していくなどの工夫が考えられる。(例：考えがうまく伝わる文章や話の学習用端末の活用については、GIGA校内リーダーを中心として、OJTなどで効率的・効果的な活用法を共有し、教科による差が生じないように学校全体で推進していく。
				② 児童生徒は、学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、広げたりすることができている。	100	90	(10)	94	94	0		
				③ 児童生徒は、自分の考えを発表する機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して発表している。	67	83	16	59	89	30		
				④ 児童生徒は、話し合う活動では、話し合う内容を理解して、相手の考えを最後まで聞き、友達の考え(自分と同じところや違うところ)を受け止めて自分の考えを伝えている。	94	95	1	76	97	21		
				⑤ 児童生徒は、振り返る活動の中で、授業の目標に沿って自分の学びの変容を実感したり、学びに対する達成感を得られたりしている。	100	96	(4)	88	97	9		
				⑥ 児童生徒は、コンピュータなどのICT機器を、他の友達と意見を交換したり、調べたりするために使用している。	83	97	14	76	97	21		
				⑦ 生徒は、自分の考えを書く機会では、自分の考えがうまく伝わるよう、資料や文章、話の組み立てなどを工夫して書いている。	83	85		65	91			
⑧ 一人一人の学びの多様性に応じて、学習の過程における形成的な評価を行っている。				100			88					
学力の向上	カリキュラム・マネジメント	①、②の平均が年度末90%以上にする。	① 指導計画の作成に当たっては、学校の教育目標の実現に向け、各教科等の教育内容を教科横断的な視点で組み立てている。	67			76		9	①、②の項目の肯定的な回答の平均が82%と中間評価より10%上がった。その要因としては授業強化月間を通して他教科の学習指導要領を個々に理解したり、研究授業後の授業整理会において、生徒の学びの変容等の分析を行ったりしたことが挙げられる。 ④の項目の小中連携については、部活動体験、計画訪問での授業参観、小中主任連絡会を行ったため、9%の上昇が見られた。 ③の項目については中間評価に続き100%であった。学校研究と連携し、生徒の学力向上のために、授業構想シートを基にした授業展開を共通実践してきたからだと考える。	①、②の項目については目標指数に届かなかったものの上昇傾向にあるため、参観する授業の指導事項を学習指導要領で事前に理解すること、その後の整理会で学び得たことを自分の教科に生かしていくこと、学期末の教科会で付けた力が身に付いているかという視点で共通実践の見直しをすることを継続させていく。 ④の項目については、今後も小中の連絡会を設定したり、主任連絡会などで話し合った内容を共有したりして、今年度の課題や現状を把握し、それらを基に次年度に向けての方向性を見出し、全職員で共有し指導に生かしていく。	
			② 児童生徒や学校、地域の実態を捉えて教育課程を編成し、実施し、評価して改善を図る一連のPDCAサイクルを確立している。	78			88		10			
			③ 全職員が学力向上の取組の目的や意義を理解し、課題の解決を期待できると納得して共通実践に取り組んでいる。	100			100		0			
			④ 校区の小・中学校間で学力について情報交換し、課題について共有している。(小中連携)	50			59		9			
			集計	75			80					
家庭学習		①の項目で80%以上にする。 ④の項目で80%以上にする。	① 家庭学習の取組として、学習方法や課題の課し方等を校内で共通理解を図っている。	89			100		11	①の項目については、教職員アンケートでは100%に到達した。教室の後ろ黒板の活用が定着してきたため、課題の内容や課し方等が共通理解できたと考える。 ④の項目については、中間評価に比べ13%上昇し、次の学年や個々の目標に向けての家庭学習における意識付けが定着してきたことが伺えるが、目標値からはかなりかけ離れているため、家庭学習習慣を身に付けることは、まだまだ不十分と言える。 ②の項目については53%と低く、帯タイムでの活用は進んでいるが、学習用端末の持ち帰りの頻度は少ないことが原因である。	①④の項目については、生徒が見通しを持って計画的に家庭学習に取り組むための教室の後ろ黒板の活用、授業内容や単元テストと効果的に関連付けられる課題設定、ワークなどの提出課題日を短いスパンで設けることなどを今後も継続していく。 ②の項目については、家庭学習の課題としてQubenaなどを活用し、出題していくなどの取組を増やしていく必要がある。 ④の項目については、教科の取組と学年全体の取組を連動させ、家庭学習の質と量を上げる工夫を行っていく必要がある。個に応じた課題など、今後は様々な取組を考え、行っていきたい。	
			② 学習用端末を活用した家庭学習に取り組めるよう課題を工夫している。	61			53		-8			
			③ 自分で計画を立てて勉強している。	72	69	71	65	78	67			
			④ 1週間に10時間以上を目標にして達成することができている。		45			58				
			集計	74	57		73	68				